

【緑地を楽しむ本】

## 『王さまになった羊飼い』

チベットの昔話

松瀬七織 再話 / イ ヨンギョン 絵  
福音館書店



むかし、ある地主の家に羊飼いの男の子がいました。どんな天気の日でも草原へ羊を連れていっていたのですが、地主からは食べるものとして、毎日ほんの少しのツアンパ

(はだか麦を炒って粉にしたもの。チベット人の主食)しかもらえず、いつもひもじい思いをしていました。ある日、うさぎの姿にされてしまっていた天の神を助け、お礼に動物の言葉がわかるようにしてもらいます。

地主の家を出た男の子は旅をし、ふとしたきっかけで、ある王国の王子の耳の病気を治してほしいと頼まれます。男の子は困ってしまう

のですが、たまたま二羽のカラスの話を聞きます。カラスによると、王子の耳の中にクモが巣をかけているから、そのクモを追い出せばいいということらしいのです。どうやって追い出すのかというと、「王子の耳のそばでたいこをたたいて、水をちよいとふりまきゃあ、子グモが『母ちゃん、母ちゃん、かみなりがなくて、あめがふってきたよ。夏がきたから出ていこうよ!』っていうにきまったらあ。」というのです。カラスの言う通りのことをして男の子は、国の半分をもらって王さまになる、というお話です。

このクモを追い出す方法がユニークで印象的。たしかに、このごろ物干し竿にかかるクモの巣をはらっても、次の日にはまたかかってくる。クモは夏が好き・・・かな。

(遠藤)